



VPC-SI 入門

この章では、シスコの仮想化されたパケットコア（シングルインスタンス（VPC-SI）について説明します。VPC-SI は、モバイル市場の新しいアプリケーションとサービスの迅速な展開を可能にする仮想化されたクラウドアーキテクチャのニーズに対応しています。

- [製品の説明（1 ページ）](#)
- [フィーチャセット（3 ページ）](#)
- [冗長性と可用性（5 ページ）](#)
- [ハイパーバイザ要件（5 ページ）](#)
- [DPDK 内部フォワーダ（8 ページ）](#)
- [キャパシティ、CEPS、およびスループット（11 ページ）](#)
- [診断およびモニタリング（11 ページ）](#)
- [StarOS VPC-SI のビルドコンポーネント（11 ページ）](#)
- [VPC-SI ブートパラメータ（12 ページ）](#)
- [ソフトウェアインストールおよびネットワーク展開（26 ページ）](#)

製品の説明

この章では、StarOS VPC-SI アーキテクチャと外部デバイスとの連携動作について説明します。

VPC-SI は、StarOS を実行している物理的な Cisco ASR 5500 シャーシの動作を、市販の（COTS）サーバ上で実行できる 1 つの仮想マシン（VM）に統合します。各 VPC-SI VM は独立した StarOS インスタンスとして動作し、物理シャーシの管理およびセッション処理機能を組み込みます。

仮想化されたモビリティ機能

VPC-SI は、ネットワークのコア内でモビリティ固有のサービスとアプリケーションを実装する、仮想化されたモビリティ機能のセットで構成されています。これらの機能には、次が含まれています。

- モバイルパケットコア

- LTE MME (モバイル管理エンティティ)、P-GW (PDN ゲートウェイ)、および S-GW (サービングゲートウェイ)
- GGSN ゲートウェイ GPRS サポートノード
- SAE-GW System Architecture Evolution ゲートウェイ
- SGSN サービング GPRS サポートノード (3G のみ)
- モバイル コントロール プレーン PCRF (ポリシーおよび課金ルール機能)、アプリケーションゲートウェイ、分析、サービス オークストレーション、抽象化および制御機能
- スマールセルゲートウェイ
 - HNBGW ホームノード B ゲートウェイ
 - HeNBGW 進化型ホームノード B ゲートウェイ
 - SAMOG S2a Mobility over GTP は、単一のサービスノードで CGW (統合アクセスゲートウェイ) と信頼された WLAN AAA プロキシ (TWAP) 機能を組み合わせます。

モバイルクラウドネットワーク (MCN) はネットワークインフラストラクチャであり、VPC-SI とその他のサービスが展開される Infrastructure as a Service (IaaS)、オークストレーションメカニズム、分析メカニズムなどが備わっています。

VM インターコネクトアーキテクチャ

次の図に、VPC-SI でサポートされている基本的な L2/L3 の相互接続を示します。

上の図では、仮想スイッチはハイパーバイザ内に組み込まれ、データセンター全体の SDN L2 機能をサポートしています。仮想スイッチは 802.1Q トランク (VLAN) を使用して他の仮想スイッチと相互接続します。通常、仮想スイッチは動的にロードされたカーネルモジュールです。

スタンドアロンインスタンス

VPC-SI は基本的に、COTS プラットフォーム上の仮想マシン (VM) 内で実行されている StarOS です。これは、企業内、リモートサイト内、または顧客のデータセンター内のスタンドアロンの単一 VM として使用できます。また、VPC-SI を大規模なサービスプロバイダー オークストレーション ソリューションの一部として統合することもできます。

シングルインスタンスアーキテクチャは、キャパシティの低いシナリオに適しています。VPC-SI 仮想ネットワーク機能 (VNF) を拡張するには、特定の VNF タイプ (P-GW、S-GW、MME、PCRF、ファイアウォール、NAT など) に対してネットワークレベルを大幅に設定する必要があります。たとえば、新しい VPC-SI P-GW が追加または削除された場合、この情報を使用してさまざまな Diameter ピアを設定する必要があります。この情報によって DNS がプロビジョニングされるか、またはプロビジョニングが解除されます。

VPC-SI は、サポートされているハイパーバイザ KVM (カーネルベースの仮想マシン) と VMware ESXi とのみ連携します。物理的なデバイスの知識はほとんどないか、まったくありません。

通常、VPC-SI はハードウェアまたはハイパーバイザの障害が発生した場合に物理的な冗長性を提供するために、シャード間セッションリカバリ（ICSR）ペアに導入する必要があります。

各 VPC-SI VM が StarOS システム全体のロールを担います。VM の外部で公開されている唯一のインターフェイスは、外部管理およびサービストラフィックのインターフェイスです。各 VM は個別に管理されます。

各 VPC-SI VM は次の StarOS 機能を実行します。

- コントローラのタスク
- CLI とロギング用のアウトオブバンド管理（vSerial と vKVM）
- ローカルコンテキスト vpnmgr
- ローカルコンテキスト管理（vNIC）
- vHDD のシステム起動イメージと設定ストレージ
- vHDD のレコードストレージ
- fastpath と slowpath を介した NPU シミュレーション
- 非ローカルコンテキスト（vNIC、1～12）。
- セッション処理の逆多重化と vpnmgr
- 暗号処理

フィーチャセット

インターフェイスおよびアドレッシング

VM は単一の CPU サブシステムを備えた仮想カードとして表されます。これにより、多くの CLI コマンド、ログ、および機能は、ASR 5500 プラットフォームで実行されている StarOS と同様に動作します。

StarOS 用に作成されたアプリケーションは、単一の仮想カードをサポートする 1 スロットの仮想シャードを備えた別のプラットフォームとして VPC-SI を見なします。

コンテキスト、サービス、プール、インターフェイス、カード、およびポートの StarOS の概念は既存のプラットフォームの場合と同様に VPC-SI に存在します。

VM が起動すると、VM プロファイル内に設定された vNIC が検出され、「仮想イーサネット」タイプのポートに相当する数が StarOS CLI に表示されます。

- VPC-SI はハイパーバイザによって提供される順序で vNIC インターフェイスを割り当てます。
 - 最初に提供されるインターフェイスは、VPC-SI 管理用の 1/1 です。
 - 2 番目に提供されるインターフェイスは、VPC-SI サービス制御およびデータトラフィック用の 1/10 です。
 - 任意の 3 番目に提供されるインターフェイスは、VPC-SI サービス制御およびデータトラフィック用の 1/11 です。
 - 任意の 4 番目以降のインターフェイスは、1/12、1/13 になります。

- サポートされているハイパーバイザにリストされているインターフェイスは、VPC-SI インターフェイスと一致させる順序で KVM BR グループまたは VMware vSwitch と一致していることを確認する必要があります。



(注) ハイパーバイザの CLI や GUI にリストされている vNIC の順序が、ハイパーバイザが VPC-SI に提供する方法と同じであることは保証できません。初期設定では、**show hardware** CLI コマンドを使用して、ハイパーバイザの vNIC 設定に表示されている MAC アドレスを調べ、VPC-SI によって学習された MAC アドレスと一致させる必要があります。これにより、VPC-SI が目的の BR グループまたは vSwitch に接続されていることが確認されます。

暗号化

VPC-SI インスタンス内の VM は、ソフトウェアベースの暗号化とパケットのトンネリングを実行します（高いスループットのハードウェアベースのサービスとは異なります）。ベアラーパケットの暗号化を多用するコールモデル、または重要な PKI（公開キーインフラストラクチャ）のキー生成レートを持つコールモデルでは、重要なコンピューティングリソースが必要になる場合があります。

セキュリティ

外部トラフィックのセキュリティは、トンネリング、暗号化、Access Control List (ACL; アクセスコントロールリスト)、コンテキストの分離、およびユーザ認証機能など、既存の StarOS プラットフォームと同様の機能を備えています。CF および SF 上のユーザポートおよびインターフェイスは、StarOS の CLI 設定によって保護されます。

仮想システムでは、データセンター機器の DI ネットワークを介してネットワーク通信が行われるため、お客様側にさらにセキュリティ上の懸念が生じます。

DI ネットワークは、システムネットワークの VLAN のメンバーシップをその特定の VPC-SI インスタンス内の VM に制限することによって、データセンター内の他のホストから分離する必要があります。ネットワークに誤って追加された他のホストによる DI ネットワークへの不正アクセス、またはルータ、スイッチ、またはハイパーバイザの侵害によって、StarOS のセキュリティ対策が中断または回避される可能性があります。このような中断により、障害、サービスの損失や、制御とベアラーパケットの検出が発生する可能性があります。DI ネットワークへのアクセスを適切に保護することは、StarOS の制御の範囲を超えています。

DI ネットワークコンポーネント (CF および SF など) の VM 間の通信は、外部から提供された SSH キーによる認証によってのみ可能になりました。さらに、システムは、DI ネットワーク内のログインに公開/秘密キーベースの SSH 認証を適用します。パスワード、キー、または LI 情報は保存されず、クリアテキストで送信されます。

オペレータが、管理およびベアラーの LI（合法的傍受）などネットワークを物理的に分離する必要がある場合は、センシティブデータを伝送するため、DI ネットワークの物理的な分離も実行する必要があります。仮想環境では、ネットワークの物理的な分離は不可能な場合、または実用的でない場合があります。これらの要件を持つオペレータは、必要に応じて十分な保

護を提供することを確認するために、ハイパーバイザとインフラストラクチャを調査する必要があります。

冗長性と可用性

プラットフォーム要件

仮想システムは、システム冗長性と可用性全体の基盤となるハードウェアとハイパーバイザに依存しています。

ハードウェアとハイパーバイザには、次が備わっている必要があります。

- 実際の冗長ハードウェアコンポーネント（電源、ディスクなど）
- 冗長ネットワークパス（デュアルファブリック/NIC、自動フェールオーバー搭載）
- 冗長ネットワークアップリンク（スイッチ、ルータなど）

基盤となるインフラストラクチャ（ホスト、ハイパーバイザ、およびネットワーク）に期待値を超える可用性と信頼性が備わっている場合にのみ、高可用性を実現できます。システムは、実行されている環境と同じ信頼性のみを備えています。

シャード間セッションリカバリ（ICSR）は、冗長ではないハードウェア（CPU、メモリ、マザーボード、ハイパーバイザソフトウェアなど）に障害が発生した場合に、可用性を高め、リカバリ時間を短縮するためにも推奨されます。ICSRは、ゲートウェイのセッションレベルでのみ冗長性を提供します。

ICSR のサポート

VPC-SI は、StarOS ソフトウェアリリースで ICSR をサポートするサービスの 2 つのインスタンス間で ICSR をサポートします。複数のサービスタイプが使用されている場合は、ICSR をサポートするサービスのみが ICSR を使用できます。

ICSR は、サイト/行/ラック/ホストの停止や主要なソフトウェア障害の冗長性をサポートしています。これを行うには、重複しないホストとネットワークインターコネクト上で 2 つのインスタンスを実行する必要があります。ICSR は、同様に設定されたインスタンス間でのみサポートされます。VPC-SI インスタンスと別のタイプのプラットフォーム（ASR 5500 など）間の ICSR はサポートされていません。

L3 ICSR がサポートされています。

詳細については、このガイドの「シャード間セッションリカバリ」の章を参照してください。

ハイパーバイザ要件

VPC-SI は、次のハイパーバイザで実行する資格があります。

- カーネルベースの仮想マシン (KVM) : QEMU エミュレータ 2.0 VPC-SI StarOS インストールビルドには、Ubuntu Server14.04 下での VM 作成用の libvirt XML テンプレートと `ssi_install.sh` が含まれています。
- KVM : Red Hat Enterprise Linux 7.2 : VPC-SI StarOS インストールビルドには、`qvpc-si_install.sh` というインストールスクリプトが含まれています。
- VMware ESXi 6.0 : VPC-SI StarOS インストールビルドには、ESXi GUI を介した VM の作成用の OVF (オープン仮想化フォーマット) と OVA (オープン仮想アプリケーション) のテンプレートが含まれています。
- VMware ESXi
 - バージョン 6.0 : VPC-SI StarOS インストールビルドには、ESXi GUI を介した VM の作成用の OVF (オープン仮想化形式) および OVA (オープン仮想アプリケーション) テンプレートが含まれています。このバージョンはリリース 21.8 より前のリリースでサポートされています。
 - バージョン 6.5 : リリース 21.8 および 21.9 でサポート
 - バージョン 6.7 : リリース 21.10 以降でサポート

VM の設定

VPC-SI では、VM が次のように設定されている必要があります。

- X vCPU (vCPU と vRAM のオプション (6 ページ) を参照)
- Y vRAM (vCPU と vRAM のオプション (6 ページ) を参照)
- 最初の vNIC は管理ポート (vNIC のオプション (7 ページ) を参照)
- 2 番目以降の vNIC はサービスポートです。1 つの vNIC を必要とし、最大 12 個が VPC でサポートされますが、この数はハイパーバイザによって制限される場合があります。
- 最初の vHDD はブートイメージと設定ストレージ用です (4 GB を推奨)。
- 2 番目の vHDD はレコードストレージ用です (オプション) (16 GB 以上)

vCPU と vRAM のオプション

CPU は、システム全体とアプリケーションを単独で完全に実行でき、複数の物理 CPU コアの搭載が可能な 1 つの物理コンピュータチップです。仮想コアテクノロジーは、物理コアごとに複数の論理プロセッサ (vCPU) をサポートします。特定のプラットフォーム上でサポートされている vCPU の合計数は、使用可能な物理コアの数と、各コアに実装されている仮想コアテクノロジーのタイプによって異なります。

CF と SF は、多数の vCPU が割り当てられ、それぞれが 1 つのスレッド (命令のシーケンス) VM 内で実行します。プラットフォーム CPU でサポートされている使用可能な vCPU の数がハ

ハイパーバイザを介して VM に割り当てることができる vCPU の最大数を超える場合があります。



- (注) VM あたりの vCPU の数は、プラットフォーム CPU でサポートされている vCPU の最大数を超えてはなりません。

パフォーマンスを最大化するには、基盤となるハードウェアに合わせて、vCPU または vRAM の数を調整することが望ましい場合があります。SF は vCPU と vRAM のさまざまな組み合わせをサポートしますが、すべての SF がインスタンス内で同じ組み合わせを共有する必要があります。

ソフトウェアは、vCPU の数とその SF の vRAM の量に基づいて、SF の起動時に SF ごとに最適な SESSMGR タスクの数を決定します。



- (注) vCPU の数、vRAM のサイズ、または vNIC t タイプ/カウント (ホットプラグ、バルーニングなどを介す) の動的なサイズ変更はサポートされていません。プロビジョニング後にこれらの値を変更する必要がある場合は、すべての VM をシャットダウンして再設定する必要があります。すべての VM 上で一度に再設定を実行できます。CPU と RAM が他のインスタンスと一致しなくなるため、一度に 1 つの VM を再設定することはできません。

vNIC のオプション

このリリースでは、次のような vNIC オプションがサポートされています。

- VMXNET3 : VMware 用の準仮想 NIC
- VIRTIO : KVM 用の準仮想 NIC
- ixgbe : Intel 10 ギガビット NIC 仮想機能
- enic : Cisco UCS NIC

ハードドライブストレージ

必須/フラッシュ (非 RAID) ドライブに追加した場合、システムは仮想マシン (VM) の下で RAID1 をサポートします。VM ごとに、この表に示す SCSI ID と一致する仮想 SCSI ディスクを CF のみで作成できます。最小ディスクサイズは 16 GB を超えている必要があります。

表 1: ディスクマッピング

タイプ	/flash (非 RAID)	hd-local1	注意
KVM	SCSI 0:0:0:0	SCSI 0:0:1:0	Raw ディスクの hd-local1 は RAID1 を 使用します
VMware	SCSI 0:0:0:0	SCSI 0:0:1:0	Raw ディスクの hd-local1 と hd-remote1 は RAID1 を使用しま す

記録ストレージ (CDR および UDR) の場合、CF VM には、予想される記録要件を満たすサイズの 2 番目の vHDD をプロビジョニングする必要があります (最小 16 GB)。レコードは、2 番目の vHDD 上の /records に書き込まれます。

DPDK 内部フォワーダ

Intel Data Plane Development Kit (DPDK) は、VPC-SI アーキテクチャの不可欠な部分であり、8 個以上の vCPU で設定された VPC-SI システムのパフォーマンスを向上させるために使用されます。DPDK 内部フォワーダ (IFTASK) は、パケットの入出力操作を担当するソフトウェアコンポーネントであり、Linux カーネルをバイパスすることによって、ユーザ空間でのパケット処理の高速パスを提供します。VPC-SI ブートプロセス中に、vCPU の比率が IFTASK に割り当てられ、残りの部分はアプリケーション処理に割り当てられます。

IFTASK で使用される vCPU を特定し、それらの使用率を表示するには、**show npu utilization table** コマンドを次のように使用します。

```
[local]mySystem# show npu utilization table
***** show npu utilization table card 1 *****
          5-Sec Avg:
lcore00|lcore01|lcore02|lcore03|lcore04|lcore05|lcore06|lcore07|
          IDLE:           |    4%|   43%|   24%|   45%|   17%|   |
          |
          QUEUE_PORT_RX:  |   34%|   56%|   |   |   |   |
          |
          QUEUE_PORT_TX:  |   |   |   |   |   |   |   |
          |
          QUEUE_VNPU_RX:  |   |   |   |   |   |   |   |
          |
          QUEUE_VNPU_TX:  |   |   |   |   |   |   |   |
          |
          QUEUE_KNI_RX:   |   57%|   |   |   |   |   |   |
          |
          QUEUE_KNI_TX:   |   |   |   |   |   |   |   |
          |
          QUEUE_THREAD_KNI: |   3%|   |   |   |   |   |   |
          |
          QUEUE_MCDMA_RX: |   |   |   |   7%|   |   5%|   |
```

```

|
|   QUEUE_MCDMA_TX:          |   |   |   |   |   |   | |
| QUEUE_THREAD_MCDMA:       |   |   |   | 8%|   | 24%|   |
| QUEUE_THREAD_VNPU:        |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_CRYPTΟ_RX:        |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_CRYPTΟ_TX:        |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_THREAD_IPC:       |   |   |   |   |   |   |   |
|   MCDMA_FLUSH:           |   |   |   | 59%| 54%| 51%|   |
| QUEUE_THREAD_TYPE_MAX:    |   |   |   |   |   |   |   |
|
|   300-Sec Avg:
| lcore00|lcore01|lcore02|lcore03|lcore04|lcore05|lcore06|lcore07| |
|   IDLE:          |   | 99%| 100%| 31%| 30%| 32%|   |
|   QUEUE_PORT_RX: |   | 0%|   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_PORT_TX: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_VNPU_RX: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_VNPU_TX: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_KNI_RX:  |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_KNI_TX:  |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_THREAD_KNI: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_MCDMA_RX:  |   |   |   | 0%| 0%| 0%|   |
|   QUEUE_MCDMA_TX:  |   |   |   |   |   |   |   |   |
| QUEUE_THREAD_MCDMA: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_THREAD_VNPU: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_CRYPTΟ_RX: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_CRYPTΟ_TX: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_THREAD_IPC: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   MCDMA_FLUSH:     |   |   |   | 68%| 69%| 67%|   |
| QUEUE_THREAD_TYPE_MAX: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|
|   900-Sec Avg:
| lcore00|lcore01|lcore02|lcore03|lcore04|lcore05|lcore06|lcore07| |
|   IDLE:          |   | 99%| 100%| 31%| 31%| 32%|   |
|   QUEUE_PORT_RX: |   | 0%|   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_PORT_TX: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_VNPU_RX: |   |   |   |   |   |   |   |   |
|   QUEUE_VNPU_TX: |   |   |   |   |   |   |   |   |

```

```

|
|     QUEUE_KNI_RX:           |         |         |         |         |         |         |
|
|     QUEUE_KNI_TX:           |         |         |         |         |         |         |
|
|     QUEUE_THREAD_KNI:       |         |         |         |         |         |         |
|
|     QUEUE_MCDMA_RX:         |         |         |         | 0%|     0%|     0%|         |
|
|     QUEUE_MCDMA_TX:         |         |         |         |         |         |         |         |
|
|     QUEUE_THREAD_MCDMA:     |         |         |         |         |         |         |         |
|
|     QUEUE_THREAD_VNPU:      |         |         |         |         |         |         |         |
|
|     QUEUE_CRYPTO_RX:        |         |         |         |         |         |         |         |
|
|     QUEUE_CRYPTO_TX:        |         |         |         |         |         |         |         |
|
|     QUEUE_THREAD_IPC:       |         |         |         |         |         |         |         |
|
|     MCDMA_FLUSH:            |         |         |         | 68%|    68%|    67%|         |
|
|     QUEUE_THREAD_TYPE_MAX:  |         |         |         |         |         |         |         |
|

```

```

thread 2 QUEUE_PORT_RX           77.22 %
thread 2 IDLE                     22.78 %
-----
thread 5 MCDMA_FLUSH              57.74 %
thread 5 IDLE                     40.13 %
thread 5 QUEUE_THREAD_MCDMA       2.13 %
-----
thread 1 QUEUE_KNI_RX            50.39 %
thread 1 QUEUE_PORT_RX           40.72 %
thread 1 IDLE                     6.13 %
thread 1 QUEUE_THREAD_KNI         2.76 %
-----
thread 3 QUEUE_THREAD_MCDMA       41.17 %
thread 3 MCDMA_FLUSH              38.31 %
thread 3 IDLE                     16.28 %
thread 3 QUEUE_MCDMA_RX           4.24 %
-----
thread 4 IDLE                     56.03 %
thread 4 MCDMA_FLUSH              43.97 %
-----

```

IFTASK vCPU を使用せずに VM の CPU 使用率を表示するには、**show cpu info** コマンドを使用します。詳細については、**verbose** キーワードを使用してください。

```

[local]mySystem# show cpu info
Card 1, CPU 0:
  Status           : Active, Kernel Running, Tasks Running
  Load Average     : 8.99, 9.50, 8.20 (11.89 max)
  Total Memory     : 16384M
  Kernel Uptime    : 0D 0H 49M
  Last Reading:
    CPU Usage      : 16.6% user, 10.5% sys, 0.0% io, 4.6% irq, 68.3% idle
    Poll CPUs     : 5 (1, 2, 3, 4, 5)
    Processes / Tasks : 234 processes / 54 tasks

```

```

Network          : 353.452 kpps rx, 3612.279 mbps rx, 282.869 kpps tx, 2632.760
mbps tx
File Usage       : 2336 open files, 1631523 available
Memory Usage     : 4280M 26.1% used, 42M 0.3% reclaimable
Maximum/Minimum:
CPU Usage        : 23.2% user, 11.2% sys, 0.1% io, 5.5% irq, 61.5% idle
Poll CPUs       : 5 (1, 2, 3, 4, 5)
Processes / Tasks : 244 processes / 54 tasks
Network         : 453.449 kpps rx, 4635.918 mbps rx, 368.252 kpps tx, 3483.816
mbps tx
File Usage       : 3104 open files, 1630755 available
Memory Usage     : 4318M 26.4% used, 46M 0.3% reclaimable

```

キャパシティ、CEPS、およびスループット

VPC-SI インスタンスのサイジングには、予想されるコールモデルのモデリングが必要です。

サービスタイプの多くは、他よりも多くのリソースを必要としています。パケットサイズ、セッションあたりのスループット、CEPS（コールイベント/秒）レート、IPSecの使用率（サイト間、サブスクライバ、LI）、その他のVMとの競合、および基盤となるハードウェアのタイプ（CPUの速度、vCPUの数）によって、ブスクライバの最大有効数がさらに制限されます。同等のハードウェアとハイパーバイザ設定でのコールモデルの認定が必要です。

診断およびモニタリング

VPC-SIはVM内で実行されるため、ハードウェアの診断またはモニタリングは行われません。ハードウェアセンサーデータ（温度、電圧、メモリエラー）の取得は、ハイパーバイザと外部モニタリングシステムを介して行われます。

VPC-SIは、CLI **show** コマンド、バルク統計情報、およびMIBトラップなどの既存のメカニズムを通じてvCPU、vRAM、およびvNICの使用状況をモニタし、エクスポートします。ただし、オペレータはハイパーバイザ内の物理CPU、RAM、およびNICの値のモニタリングのほうが有用であると気づく場合があります。

vNICには可変の最大スループット（たとえば、1 Gbpsまたは10 Gbpsとして定義されていない）があるため、スループットのパーセンテージとして使用率をエクスポートするカウンタとバルク統計情報の値がほとんどない場合があります。絶対値（bps）はVPC-SIから取得できませんが、物理インフラストラクチャの使用率をハイパーバイザから取得する必要があります。これは、最大スループットが固定されるため、パススルーPF NICには適用されません。

StarOS VPC-SI のビルドコンポーネント

次のStarOS ビルドのファイル名のタイプは、次のようにVPC-SIと関連付けられています。

- **qvpc-si-<version>.iso** : 初期インストールまたはスタートオーバー ISO ファイル

- **qvpc-si-<version>.bin** : すでに実行されているシステムの更新、アップグレード、またはリカバリファイル。詳細については、「*StarOS* 管理操作」の章を参照してください。
- **qvpc-si-template-libvirt-kvm-<version>.tgz** : KVM libvirt テンプレートと `ssi_install.sh`
- **qvpc-si-template-vmware-<version>.ova** : VMware OVA テンプレート
- **qvpc-si-<version>.qcow2.gz** : KVM QCOW2 ディスクテンプレート

VPC-SI ブートパラメータ

起動パラメータファイルは、起動する前に *StarOS* に設定項目を渡すための手段を提供します。これらのパラメータは、管理、サービス、および VNFМ インターフェイスの詳細などの項目と *StarOS* の起動時に作成された内部フォワーダタスク (iftask) の設定を指定します。

起動パラメータは複数の方法で送信され、すべての方式が同じパラメータ名と使用方法を使用します。ブートパラメータファイルの最初の場所は、最初の VM ドライブ (`/boot1/param.cfg` など) の最初のパーティションになります。検索された 2 番目の場所は、仮想 CD-ROM ドライブである設定ドライブ上にあります。OpenStack を使用している場合は、ターゲットの起動パラメータのファイル名を `staros_param.cfg` として指定します。OpenStack を使用していない場合は、ルートディレクトリに `staros_param.cfg` を使用して ISO イメージを作成し、この ISO を VM の最初の仮想 CD-ROM ドライブに接続します。

VM が起動すると、最初に CFE と呼ばれるブート前環境で `param.cfg` ファイルが解析されます。VM が Linux を開始すると、仮想 CD-ROM ドライブにアクセスして、`staros_param.cfg` ファイルを解析します。`/boot1/param.cfg` ファイルに保存されている値との競合がある場合は、`staros_param.cfg` のパラメータが優先されます。

起動パラメータファイルのフォーマット

起動パラメータファイルの構造は次のとおりです。

```
VARIABLE_NAME = VALUE
```

行区切りとして改行を使用して、1 行につき 1 つの変数を指定します (UNIX テキストファイル形式)。変数名と値は大文字と小文字が区別されません。無効な値は無視され、エラー通知が VM コンソールに表示されます。変数の値が重複している場合 (同じ変数名に 2 つの異なる値が指定されている場合)、最後に定義された値が使用されます。

数値にゼロを埋める必要はありません。たとえば、`PCI_ID` は `0:1:1.0` の場合、`0000:01:01.0` と同様に扱われます。

ネットワーク インターフェイス ID

VPC-SI ハイパーバイザによって提供される順序で vNIC インターフェイスを割り当てます。ハイパーバイザの CLI や GUI にリストされている vNIC の順序が、ハイパーバイザが VM に提供する方法と同じであることは保証できません。

VPC-SI が vNIC を検出する順序は PCI バスの列挙順に従い、準仮想デバイスも PCI バスで表されます。PCI バスは、同じレベルの追加デバイスの前にブリッジが探索される深さ優先の方法で列挙されます。すべてのネットワークインターフェイスのタイプが同じ場合、PCI トポロジを認識するだけで vNIC の正しい順序を取得できます。ネットワークインターフェイスのタイプが異なる場合、その順序は PCI トポロジに加えて VM 内のデバイスドライバのロード順序に依存します。デバイスドライバのロード順序は、ソフトウェアのリリース順と同じである保証はありませんが、一般的には準仮想デバイスがパススルーデバイスよりも優先されます。

NIC を識別するために使用できる方式はいくつかあります。

- MAC アドレス：インターフェイスの MAC アドレス
- 仮想 PCI ID
- 結合インターフェイス：ネットワークデバイスのボンディングを使用すると、ネットワークインターフェイスはスレーブインターフェイス ロールとして機能するように識別されます。ボンドのスレーブインターフェイスは、MAC、PCIID、またはインターフェイスタイプを使用して識別されます。
- インターフェイスタイプおよびインスタンス番号

仮想 PCI ID

PCI バス上のデバイスは、ドメイン、バス、デバイス、および機能番号と呼ばれる一意のタプルによって識別されます。これらの識別子は、いくつかの方法で識別できます。

ゲスト内では、`lspci` ユーティリティによって次のようにバスの設定が表示されます。

```
# lspci
00:00.0 Host bridge: Intel Corporation 440FX - 82441FX PMC [Natoma] (rev 02)
00:01.0 ISA bridge: Intel Corporation 82371SB PIIX3 ISA [Natoma/Triton II]
00:01.1 IDE interface: Intel Corporation 82371SB PIIX3 IDE [Natoma/Triton II]
00:01.2 USB controller: Intel Corporation 82371SB PIIX3 USB [Natoma/Triton II] (rev 01)
00:01.3 Bridge: Intel Corporation 82371AB/EB/MB PIIX4 ACPI (rev 03)
00:02.0 VGA compatible controller: Cirrus Logic GD 5446
00:03.0 System peripheral: Intel Corporation 6300ESB Watchdog Timer
00:04.0 Unclassified device [00ff]: Red Hat, Inc Virtio memory balloon
00:05.0 Ethernet controller: Red Hat, Inc Virtio network device
00:06.0 Ethernet controller: Red Hat, Inc Virtio network device
```

この仮想バスのドメイン、バス、デバイス、および機能番号を次に示します。

表 2: 仮想 PCI ID

回線	ドメイン	バス	デバイス	機能
00:00.0 Host bridge: Intel Corporation 440FX - 82441FX PMC [Natoma] (rev 02)	0	0	0	0
00:01.0 ISA bridge: Intel Corporation 82371SB PIIX3 ISA [Natoma/Triton II]	0	0	1	0

回線	ドメイン	バス	デバイス	機能
00:01.1 IDE インターフェイス : Intel Corporation 82371SB PIIX3 IDE [Natoma/Triton II]	0	0	1	1
00:01.2 USB コントローラ : Intel Corporation 82371SB PIIX3 USB [Natoma/Triton II] (rev 01)	0	0	1	2
00:01.3 ブリッジ : Intel Corporation 82371AB/EB/MB PIIX4 ACPI (rev 03)	0	0	1	3
00:02.0 VGA 互換コントローラ : Cirrus Logic GD 5446	0	0	2	0
00:03.0 システム周辺機器 : Intel Corporation 6300ESB ウォッチドッグタイマー	0	0	3	0
00:04.0 未分類のデバイス [00ff] : Red Hat、 Inc Virtio メモリバルーニング	0	0	4	0
00:05.0 イーサネットコントローラ : Red Hat、 Inc Virtio ネットワークデバイス	0	0	5	0
00:06.0 イーサネットコントローラ : Red Hat、 Inc Virtio ネットワークデバイス	0	0	6	0

libvirt ベースの仮想マシンの場合は、**virsh dumpxml** コマンドから仮想 PCI バストポロジを取得できます。libvirt スキーマでは、デバイス番号に *slot* という用語が使用されることに注意してください。これは、前の例で使用した仮想マシンにおける xml の説明のスニペットです。

```
<interface type='bridge'>
  <mac address='52:54:00:c2:d0:5f' />
  <source bridge='br3043' />
  <target dev='vnet0' />
  <model type='virtio' />
  <driver name='vhost' queues='8' />
  <alias name='net0' />
  <address type='pci' domain='0x0000' bus='0x00' slot='0x05' function='0x0' />
</interface>
<interface type='bridge'>
  <mac address='52:54:00:c3:60:eb' />
  <source bridge='br0' />
  <target dev='vnet1' />
  <model type='virtio' />
  <alias name='net1' />
  <address type='pci' domain='0x0000' bus='0x00' slot='0x06' function='0x0' />
</interface>
```

インターフェイスタイプおよびインスタンス番号

ここで NIC は、Linux デバイスドライバの名前 (*virtio_net*、*vmxnet3*、*ixgbe*、*i40e* など) とそのインスタンス番号を使用して、そのタイプによって識別されます。インスタンス番号は、そ

のタイプのインターフェイスのPCI列挙順に基づいています。インスタンス番号1から始まります。インターフェイスタイプは、パススルーインターフェイスとSR-IOV 仮想機能だけでなく、両方の準仮想タイプを識別するために使用できます。PCIバス上のデバイスのPCI列挙の順序は、**lspci** ユーティリティで確認できます。

たとえば、次のゲストPCIトポロジのCFは、**virtio_net** インターフェイス番号1が00:05.0のイーサネットコントローラであり、**virtio_net** インターフェイス番号2が00:06.0のイーサネットコントローラであることを示しています。出力は、ゲストで実行された**lspci** コマンドからのものです。

```
# lspci
```

```
00:00.0 Host bridge: Intel Corporation 440FX - 82441FX PMC [Natoma] (rev 02)
00:01.0 ISA bridge: Intel Corporation 82371SB PIIX3 ISA [Natoma/Triton II]
00:01.1 IDE interface: Intel Corporation 82371SB PIIX3 IDE [Natoma/Triton II]
00:01.2 USB controller: Intel Corporation 82371SB PIIX3 USB [Natoma/Triton II] (rev 01)
00:01.3 Bridge: Intel Corporation 82371AB/EB/MB PIIX4 ACPI (rev 03)
00:02.0 VGA compatible controller: Cirrus Logic GD 5446
00:03.0 System peripheral: Intel Corporation 6300ESB Watchdog Timer
00:04.0 Unclassified device [00ff]: Red Hat, Inc Virtio memory balloon
00:05.0 Ethernet controller: Red Hat, Inc Virtio network device
00:06.0 Ethernet controller: Red Hat, Inc Virtio network device
```

サポートされているLinuxドライバの完全なリストを次に示します。

表 3: サポートされているLinuxドライバ

タイプ	PCI ベンダー/デバイス ID	ドライバ名
VIRTIO (KVM 用の準仮想 NIC)	0x10af / 0x1000	virtio_net
VMXNET3 (VMware 用の準仮想 NIC)	0x15ad / 0x07b0	vmxnet3

タイプ	PCI ベンダー/デバイス ID	ドライバ名
Intel 10 ギガビットイーサネット	0x8086 / 0x10b6	ixgbe
	0x8086 / 0x10c6	
	0x8086 / 0x10c7	
	0x8086 / 0x10c8	
	0x8086 / 0x150b	
	0x8086 / 0x10dd	
	0x8086 / 0x10ec	
	0x8086 / 0x10f1	
	0x8086 / 0x10e1	
	0x8086 / 0x10db	
	0x8086 / 0x1508	
	0x8086 / 0x10f7	
	0x8086 / 0x10fc	
	0x8086 / 0x1517	
	0x8086 / 0x10fb	
	0x8086 / 0x1507	
	0x8086 / 0x1514	
	0x8086 / 0x10f9	
	0x8086 / 0x152a	
	0x8086 / 0x1529	
	0x8086 / 0x151c	
	0x8086 / 0x10f8	
	0x8086 / 0x1528	
0x8086 / 0x154d		
0x8086 / 0x154f		
0x8086 / 0x1557		
Intel 10 ギガビット NIC 仮想機能	0x8086 / 0x10ed	ixgbev
	0x8086 / 0x1515	
Cisco UCS NIC	0x1137 / 0x0043	enic
	0x1137 / 0x0044	
	0x1137 / 0x0071	

タイプ	PCI ベンダー/デバイス ID	ドライバ名
Mellanox ConnectX-5 (注) Mellanox は、ユーザプレーンでのみサポートされています。	0x15b3 / 0x1017 0x15b3 / 0x1018	mlx5_core
Intel 710 ファミリ NIC (PF)	0x8086 / 0x1572 (40 ギガ) 0x8086 / 0x1574 (40 ギガ) 0x8086 / 0x1580 (40 ギガ) 0x8086 / 0x1581 (40 ギガ) 0x8086 / 0x1583 (40 ギガ) 0x8086 / 0x1584 (40 ギガ) 0x8086 / 0x1585 (40 ギガ) 0x8086 / 0x158a (25 ギガ) 0x8086 / 0x158b (25 ギガ)	i40e**
Intel 710 ファミリ NIC 仮想機能	0x8086 / 0x154c	i40evf

**注：i40eドライバの使用時に、ホスト上で作成された SRIOV VF に対して MAC アドレスの割り当てが動的に行われれないという既知の問題が存在します。StarOS VM を起動するには、MAC アドレスの割り当てが必要です。回避策として、MAC アドレスの割り当てはホストから設定する必要があります。詳細は次のリンクを参照してください。<https://www.intel.com/content/dam/www/public/us/en/documents/technology-briefs/xl710-sr-iov-config-guide-gbe-linux-brief.pdf>

VPC-SI ブートパラメータの設定

VPC-SI VM には、管理ネットワークに接続するために 1 つのインターフェイスが設定されています。このインターフェイスは通常、StarOS で設定され、Day 0 設定に含まれている必要があります。管理インターフェイスは、メインの StarOS 設定ファイルを使用してスタティックアドレスの割り当てをサポートします。

0～4 個の追加ネットワーク インターフェイスはサービスポートとして機能します。これらのインターフェイスは、StarOS によって設定されます。通常、これらのポートは VNF インフラストラクチャ (VNFI) のトランクポートとして設定されます。

仮想ネットワーク機能 (VNF) マネージャ (VNFM) が存在する場合は、それに接続されているネットワーク インターフェイスを設定するオプションが VPC-SI VM に備わっています。このインターフェイスは、DHCP またはスタティック IP 割り当てを使用して設定でき、VNFM 以上のレベルのオーケストレータとの通信に使用されます。このインターフェイスは、メインアプリケーションが起動する前に有効になります。

表 4: VPC-SI ブートパラメータ

パラメータ	説明
MGMT_INTERFACE = <i>value</i>	<p>VPC-SI VM 上の管理ポートへのインターフェイス有効な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • MAC: xx:xx:xx:xx:xx:xx • PCI_ID: xxx:xx:xx.x (Domain:Bus:Device.Function) • TYPE : <i>drive-name-instance-number</i> • BOND : <i>slave-interface-A,slave-interface-B</i> <p>インターフェイス識別子の決定については、ネットワーク インターフェイス ID (12 ページ) を参照してください。</p>
SERVICE#_INTERFACE = <i>value</i>	<p>サービスポート番号 # へのインターフェイス (# は 1 ~ 4)。</p> <p>サービスインターフェイスは、MGMT_INTERFACE についての上記と同じ値をサポートしています。</p>
SERVICE_INTERFACE_MTU = <i>value</i>	<p>デフォルトでは、IFTASK プロセスは最大インターフェイス MTU を 2,100 バイトに設定します。</p> <p><i>value</i> は 576 ~ 9,100 バイトの整数にする必要があります。</p>
VNFM_INTERFACE = <i>value</i>	<p>仮想ネットワーク機能マネージャ (VNFM) またはオーケストレータへのオプションのネットワークインターフェイス。</p> <p>VNFM インターフェイスでは、MGMT_INTERFACE についての上記と同じ値がサポートされています。</p>
VNFM_IPV4_ENABLE ={ <i>true</i> <i>false</i> }	VNFM インターフェイスを有効にします。
VNFM_IPV4_DHCP_ENABLE ={ <i>true</i> <i>false</i> }	VNFM に対して DHCP を有効にします。
VNFM_IPV4_ADDRESS = <i>value</i>	DHCP が使用されていない VNFM の IP アドレスを指定します。
VNFM_IPV4_NETMASK = <i>value</i>	DHCP が使用されていない VNFM の IP アドレスのネットマスクを指定します。

パラメータ	説明
VNFM_IPV4_GATEWAY =value	DHCP が使用されていない VNFM の IP アドレスのゲートウェイを指定します。
IFTASK_CRYPTCO_CORES =value	<p>(任意)</p> <p>(任意) IFTASK_CRYPTCO_CORES</p> <p>IFTASK_SERVICE_TYPE が「2」 (EPDG) に設定されている場合、このパラメータは iftask コアの</p> <p>暗号処理に割り当てるパーセンテージを指定します。値の範囲は 0～50パーセントですが、専用のコアの上限は 4 です。</p> <p>デフォルトは 0 です。</p> <p>このパラメータは IFTASK_SERVICE_TYPE が「2」 (EPDG) に設定されている場合のみ使用する必要があります。他のサービスタイプに</p> <p>設定されている場合、このパラメータは「0」に設定する必要があります。</p>
IFTASK_MCDMA_CORES =value	<p>(任意) マルチチャンネルダイレクトメモリアクセス (MCDMA) に割り当てられたコア数を iftask コアの総数の割合として設定します。まず、上記の IFTASK_CORES パラメータを定義する必要があります。注 : NUMA 最適化が有効になっており、この MCDMA コアカウント設定も構成されている場合は、</p> <p>IFTASK_CORES=percentage-of-cores を偶数に設定する必要があります。これにより、MCDMA スレッドが NUMA ノード間で均等に分散されます。</p>

パラメータ	説明
CHASSIS_ID=value	<p>シャーシ ID は、CLI 設定（管理者クレデンシャル、SNMP コミュニティ、RADIUS/Diameter データ、認証データなど）で select コマンドを保護します。設定を保存またはロードする必要があるため、通常は、CLI コマンドからランダムなデータとユーザシードを使用して生成されます。その後、シャーシ ID はシステムの「/flash」ストレージに保存され、後で保存された設定をロードするために使用されます。</p> <p>このオプションを設定すると、/flash のパラメータコンフィギュレーションファイルからシャーシ ID がロードされます。/flash のシャーシ ID は無視され（以前のバージョンからのアップグレードをサポート）、CLI コマンドを使用した新しいシャーシ ID の生成は禁止されます。この方法を使用して指定した場合、シャーシ ID は /flash に保存されなくなります。また、この操作では、ESC（または別の VNFМ）で VM を管理し、シャーシ ID を指定する必要もあります。</p>
IFTASK_SERVICE_TYPE=value	<p>（任意）サービスメモリを計算しサービス固有の機能を有効にするために展開するサービスタイプを指定します。デフォルトは 0 です。</p> <p>次のサービスタイプを指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0 = VPC サービスタイプ • 1 = GiLAN サービスタイプ • 2 = ePDG サービスタイプ • 3 = CUPS コントローラサービスタイプ • 4 = CUPS フォワーダサービスタイプ
FORWARDER_TYPE=value	<p>フォワーダタイプを「vpp」または「iftask」として指定します。</p> <p>デフォルトでは、フォワーダタイプは「iftask」です。フォワーダタイプは、FORWARDER_TYPE が VPP として適切に設定されている場合にのみ、VPP になります。</p> <p>例：FORWARDER_TYPE=vpp</p>

params.cfg の例

```

MGMT_INTERFACE=MAC:00:01:02:03:04:05
SERVICE1_INTERFACE=PCI_ID:0000:01:02.0
SERVICE2_INTERFACE=PCI_ID:0000:01:03.0
VNFM_INTERFACE=MAC:00:01:02:03:04:AA
VNFM_IPV4_ENABLE=true
VNFM_IPV4_DHCP_ENABLE=false
VNFM_IPV4_ADDRESS=10.1.1.100
VNFM_IPV4_NETMASK=255.255.255.0
VNFM_IPV4_GATEWAY=10.1.1.1
IFTASK_MCDMA_CORES=20
CHASSIS_ID=2sg9x1wqbj
IFTASK_SERVICE_TYPE=0

```

StarOS コマンド **show cloud hardware iftask** を使用して iftask ブートパラメータが有効になったことを確認します。

VNFM インターフェイスオプションの設定



(注) これらの設定オプションは任意です。

仮想ネットワーク機能マネージャ (VNFM) インターフェイスは、各 VM と VNFM の間で通信するように設計されています。VNFM インターフェイスはメインアプリケーションの前に初期化するため、インターフェイスを設定できるのは起動パラメータのみとなります。

デフォルトでは、VNFM インターフェイスは無効になっています。

VNFM IPv4 インターフェイスの有効化

デフォルト値は [False] (無効) です。

変数	有効な値
VNFM_IPV4_ENABLE	True または False

IPv4 DHCP クライアントの設定

変数	有効な値
VNFM_IPV4_DHCP_ENABLE	True または False

IPv4 スタティック IP の設定

(注) IPv4 DHCP クライアントが有効になっている場合、スタティック設定パラメータは無視されません。

変数	有効な値
VNFM_IPV4_ADDRESS	x.x.x.x
VNFM_IPV4_NETMASK	x.x.x.x
VNFM_IPV4_GATEWAY	x.x.x.x

VNFM IPv6 インターフェイスを有効にします。

変数	有効な値
VNFM_IPV6_ENABLE	True または False

IPv6 スタティック IP 設定の有効化

変数	有効な値
VNFM_IPV6_STATIC_ENABLE	True または False

True に設定すると、次の項に示すように、スタティック IP パラメータの設定がインターフェイスに適用されます。False に設定すると、インターフェイスはステートレス自動設定 (RFC4862) と DHCPv6 の両方を使用してインターフェイスのアドレスを設定しようとしません。

IPv6 スタティック IP の設定



- (注) 「VNFM_IPV6_ENABLE」パラメータ値が false に設定されている場合、スタティック設定パラメータは無視されます。IPv6 アドレスフィールドは、RFC 5952 に準拠している必要があります。プレフィックスは /64 で固定されています。

変数	有効な値
VNFM_IPV6_ADDRESS	x:x:x:x:x:x:x
VNFM_IPV6_GATEWAY	x:x:x:x:x:x:x

VPP 設定パラメータ

以降の項では、FORWARDER_TYPE に VPP を選択した場合にのみ適用されるパラメータを示します。これらのパラメータを使用すると、VPP の CPU とインターフェイス設定をきめ細かく制御できます。



- (注) どのような VPP 設定パラメータをオーバーライドする場合も、事前にシスコのアカウント担当者に連絡してオーバーライド値を確認してください。

VPP の CPU 割り当て

VPP ワーカーは、CPU コア全体を消費するリアルタイムのスレッドです。VPP のメインスレッドはコア全体を消費しませんが、ビジー状態になる可能性があります。したがって、競合を回避するために割り当てます。

次の表に、VPP-CPU パラメータを示します。

表 5: VPP-CPU パラメータ

パラメータ	説明
VPP_CPU_MAIN=value	Linux プロセッサ番号を指定します。これは 0 ~ (CPU の数から 1 を差し引いた数) になります。デフォルト値は 1 です。 次の例を使用して、メインスレッドの値を Linux プロセッサ番号 1 に設定します。 VPP_CPU_MAIN=1
VPP_CPU_WORKER_CNT=value	Linux プロセッサに設定されているワーカー スレッドの数を指定します。有効な値は 0 ~ (CPU の数から 3 を差し引いた数) です。デフォルト値は、Linux CPU の 50 %、または VPP_CPU_WORKER_LIST 内の CPU の数です。 ワーカー スレッドの数を 3 に設定するには、次の例を使用します。 VPP_CPU_WORKER_CNT=3
VPP_CPU_WORKER_LIST=value	Linux プロセッサに設定されたワーカー スレッドを指定します。ワーカー リストは、Linux プロセッサ番号をカンマで区切ったリストです。有効な値は 0 ~ (CPU の数から 1 を差し引いた数) です。デフォルトは、すべてのソケットに割り当てられるラウンドロビン番号であり、すべてのソケットの最初のコアと最初のソケットの 2 番目のコアをスキップします。 次の例を使用して、ワーカー スレッドの数を Linux プロセッサ 数 2、9、および 10 に設定します。 VPP_CPU_WORKER_LIST=2,9,10

デフォルトの DPDK 設定

表に示す次のパラメータは、一般的に DPDK を設定するか、またはインターフェイスのデフォルトを設定します。

表 6: DPDK パラメータ

パラメータ	説明
VPP_DPDK_BUFFERS=value	<p>DPDK バッファの数を指定します。最小バッファは 32,000 で、最大値は VM サイズに基づきます。デフォルトのバッファ数は 128,000 です。</p> <p>DPDK バッファを 200,000 に設定するには、次の例を使用します。</p> <pre>VPP_DPDK_BUFFERS=200000</pre>
VPP_DPDK_RX_QUEUES=value	<p>特定の設定がないすべてのインターフェイスの RX キューの数を指定します。有効な値の範囲は、インターフェイスのタイプとホストの設定に応じて 1 ~ 64 になります。デフォルト値は VPP_CPU_WORKER_COUNT から計算され、各ワーカーに少なくとも 1 つのキューが割り当てられた状態でキューの全体的な数を最小限に抑えます。</p> <p>次の例を使用して、デフォルトの RX キューの数を 2 に設定します。</p> <p>(注) 一致しない値は、インターフェイスのタイプとホストの設定に基づいて設定できます。</p> <pre>VPP_DPDK_RX_QUEUES=2</pre>
VPP_DPDK_TX_QUEUES=value	<p>特定の設定がないすべてのインターフェイスの TX キューの数を指定します。有効な値の範囲は、インターフェイスのタイプとホストの設定に応じて 1 ~ 64 になります。デフォルト値は VPP_DPDK_RX_QUEUES です。</p> <p>次の例を使用して、デフォルトの TX キューの数を 4 に設定します。</p> <p>(注) 一致しない値は、インターフェイスのタイプとホストの設定に基づいて設定できます。</p> <pre>VPP_DPDK_TX_QUEUES=4</pre>

パラメータ	説明
<code>VPP_DPK_RX_DESCS=value</code>	<p>特定の設定がないすべてのインターフェイスの RX 記述子の数を指定します。有効な値の範囲は、インターフェイスのタイプとホストの設定に応じて 128 ~ 128,000 になります。デフォルト値は、指定されていないドライバ依存の値です。</p> <p>次の例を使用して、RX 記述子のデフォルトの数を 256 に設定します。</p> <p>(注) 一致しない値は、インターフェイスのタイプとホストの設定に基づいて設定できます。</p> <pre>VPP_DPK_RX_DESCS=256</pre>
<code>VPP_DPK_TX_DESCS=value</code>	<p>特定の設定がないすべてのインターフェイスの TX 記述子の数を指定します。有効な値の範囲は、インターフェイスのタイプとホストの設定に応じて 128 ~ 128,000 になります。デフォルト値は、<code>VPP_DPK_RX_DESCS</code> または指定されていないドライバ依存の値です。</p> <p>次の例を使用して、デフォルトの TX 記述子の数を 512 に設定します。</p> <p>(注) 一致しない値は、インターフェイスのタイプとホストの設定に基づいて設定できます。</p> <pre>VPP_DPK_TX_DESCS=512</pre>

インターフェイス固有の設定

表に示した次のパラメータは、個々のインターフェイスを調整します。これらのパラメータは、デフォルトの DPK 設定（該当する場合）もオーバーライドします。

表 7: インターフェイスのパラメータ

パラメータ	説明
<code><ROLE>_VPP_RX_QUEUES=value</code>	<p>インターフェイスロールの RX キューの数を指定します。有効な値の範囲は、インターフェイスのタイプとホストの設定に応じて 1 ~ 64 になります。デフォルト値は未指定です。</p> <p>サービスポート 1 ~ 2 の RX キューの数を設定するには、次の例を使用します。</p> <pre>SERVICE1_INTERFACE_VPP_RX_QUEUES=2</pre>

パラメータ	説明
<code><ROLE>_VPP_TX_QUEUES=value</code>	<p>インターフェ이스ロールの TX キューの数を指定します。有効な値の範囲は、インターフェイスのタイプとホストの設定に応じて 1 ~ 64 になります。デフォルト値は <code><ROLE>_VPP_RX_QUEUES</code>、または <code>unspecified</code> です。</p>
<code><ROLE>_VPP_RX_DESCS=value</code>	<p>インターフェ이스ロールの RX 記述子の数を指定します。有効な値の範囲は、インターフェイスのタイプとホストの設定に応じて 128 ~ 128,000 になります。デフォルト値は未指定です。</p> <p>サービスポート 1 の RX 記述子の数を 1,024 に設定するには、次の例を使用します。</p> <pre>SERVICE1_INTERFACE_VPP_RX_DESCS=1024</pre>
<code><ROLE>_VPP_TX_DESCS=value</code>	<p>インターフェ이스ロールの RX 記述子の数を指定します。有効な値の範囲は、インターフェイスのタイプとホストの設定に応じて 128 ~ 128,000 になります。デフォルト値は <code><ROLE>_VPP_RX_DESCS</code>、または <code>unspecified</code> です。</p>
<code><ROLE>_VPP_WORKER_LIST=value</code>	<p>インターフェ이스ロールのワーカースレッドを指定します。ワーカーリストは、Linux プロセッサ番号をカンマで区切ったリストです。有効な値は 0 ~ (CPU の数から 1 を差し引いた数) です。デフォルトは、すべてのソケットに割り当てられるラウンドロビン番号であり、すべてのソケットの最初のコアと最初のソケットの 2 番目のコアをスキップします。</p> <p>サービスポート 1 のワーカースレッドリストを Linux プロセッサ番号 2 および 3 に設定するには、次の例を使用します。</p> <pre>SERVICE1_INTERFACE_VPP_WORKER_LIST=2,3</pre>

ソフトウェアインストールおよびネットワーク展開

このガイドでは、VPC-SI が正しくインストールされ、市販 (COTS) サーバ上の仮想マシン (VM) 上で実行されていることを前提としています。

サポートされているオペレーティングシステムおよびハイパーバイザパッケージとプラットフォーム設定の詳細については、シスコの担当者にお問い合わせください。シスコのアドバンストサービス（AS）グループは、VPC-SI製品のコンサルティング、インストール、およびネットワーク展開のサービスを提供しています。

